花園大学文学部研究紀要　第53号　2021年３月　抜刷

中国人日本語学習者の論文にみられる副詞「一番」「最も」の使用傾向

The Use of Adverbs *Ichiban* and *Mottomo* in Academic Papers by Chinese Learners of Japanese Language

徐　　衛

中国人日本語学習者の論文にみられる副詞「一番」「最も」の使用傾向

The Use of Adverbs *Ichiban* and *Mottomo* in Academic Papers by Chinese Learners of Japanese Language

蘇州大学交換教員　徐　衛

キーワード　副詞　日本語学習者　論文　文体差　学習指導

要旨

本稿では先行研究を踏みながら中国語母語話者の日本語卒業論文と修士論文における副詞「一番」と「最も」の使用状況を調査、分析した。また、母語話者の学術論文との対比も行なった。その結果、「最も」の使用率は「一番」の使用率と拮抗しており、学習者のレポートと作文にみられた使用傾向と大きな変化が見られないため、「一番」「最も」の文体差は上級レベルの学習者の硬い表現にあまり意識されていないことが明らかになった。以上により、文体差による語彙の使い分けおよび語彙選択の有効な指導についてまだ課題の残ることが指摘された。

1．はじめに

学習者にとって、文章全体の文体に合わせて語彙（単語）を適切に選択することは難しい。それに対する指導上の問題がよく話題になっている。

小矢野（1984）は、副用語の指導上の問題として「日本語学習歴に基づくレベルの差、文型・読解・作文・会話など教科内容の差」（p.79）を指摘している。佐藤（1981）は、上級段階の作文指導について「微妙な表現をあらわす副詞も類義語での言い換えなどで意味の把握はできない。」（p.79）と指摘し、中級後半から上級の作文で現れる誤りの傾向として「副詞選択の未熟（口語的副詞の乱用）」（p.90）を指摘している。

そこで本稿では、中国人日本語学習者の論文（卒業論文と修士論文）における副詞「一番」と「最も」の使用状況を考察し、上級段階の学習指導上の問題点を検討したい。

２．先行研究

(一)「一番」「最も」の意味用法について

仁田（2002：166）では、「一番」と「最も」を最上級を表す純粋程度の副詞としている。

「一番」と「最も」を小学館の『大辞泉』『類語例解辞典』で調べれば、その語義はそれぞれ以下の通りである。

・いちばん【一番】［副］　１　この上なく。最も。「君が一番上手だ」
　２　ためしに。思いきって。ひとつ。「できるかどうか、ここで一番試してみよう」
類語：最も（もっとも）一等（いっとう）

・もっとも【最も】［副］《「尤（もっと）も」と同語源》比べてみて程度が他のどれよりもまさることを表す。いちばん。何よりも。「最も人口が多い」「最も信頼できる」
類語：一番（いちばん）一等（いっとう）

「一番」は名詞と副詞の用法があるが、本研究では副詞の用法のみを取り扱う。副詞「最も」は「いちばん。何よりも。」との意味解釈があり、類語に「一番（いちばん）」が示される。副詞「一番」は「この上なく。最も。」との意味解釈があり、類語に「最も」が示される。以上によれば、両者は意味の一致するものであることがわかる。

飛田、浅田（2018）によれば、「一番」は、「相対的に程度が最高であることを表すが、かなり主観的で、しばしば感動の暗示を伴う」（p.46）副詞であるが、「最も」は、「かなり文章語で公式の発言に多用され、日常会話にはあまり登場し

ない」（p.550）との文体的特徴がある。

中俣（2019）では、選定した対象語としての副詞164語について、『日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を利用して用例を収集し、サブコーパスにおける語の出現数の多変量解析を行ない、分布や頻度などの比較によって、６つのクラスター[1]を認定した。そのうち、「いちばん」は「クラスター１　あらたまり・軟」、「もっとも」は「クラスター４　くだけ・硬」に含まれる語とされる。

以上をまとめてみれば、類義語である「一番」と「最も」は、文体差に注目すると、「一番」は、日常会話または柔らかい書き言葉に用いられ、それに対して「最も」は、公式の発言や硬い書き言葉に用いられる表現ということになる。

（二）「一番」「最も」の使用実態について

両者の学習者の使用実態に関する先行研究としては、石黒（2004）と渡辺（2010）があげられる。

石黒（2004）は、日本の一橋大学で上級レベルの授業に出席した学生の提出した436のレポート、および中国の東北師範大学で学ぶ学部学生が提出した30のレポートを調査対象とし、レポートにおける「全然」「一番」「多分」などといった漢語副詞の使用実態を調査したものである。調査結果の一つとしてわかったのは、「一番」（116例）と「もっとも」（100例）の使用率が拮抗しており、一橋大学では「一番」が「もっとも」を若干上回っているが、東北師範大学では16：３と「一番」が選ばれる傾向がかなり強いということである。

渡辺（2010）は、学部留学生１年生の必修科目である日本語（作文）Ⅱの受講者計42名の作文と日本人学生計30人の書いた作文[2]を調査対象とし、作文に出現した副詞と出現回数を調べたものである。結果として、留学生と日本人学生の書いた作文には両者とも程度副詞がもっとも多く、出現した程度副詞の中で、もっとも出現回数が多かったのが「一番」「もっとも」である。また、留学生の作文においては、「一番」が76例、「もっとも」が43例（計119例）で、「もっとも」の

[1] 「クラスター１　あらたまり・軟、クラスター２　あらたまり・硬、クラスター３　くだけ・軟、クラスター４　くだけ・硬、クラスター５　例外・白書、クラスター６　例外・韻文」である。

[2] テーマ限定（日本は住みやすい国か）、字数制限（800字）の論述文である。

使用率は約 36.1％であるが、日本人学生の作文においては、「一番」が16例、「もっとも」が12例（計28例）で、「もっとも」の使用率は約42.9％である。日本人学生のほうが書き言葉としての表現を取捨選択し、使用しているが、文体差を意識した使い分けについては留学生、日本人学生とも課題が残ったと指摘している。

先行研究で中国人学生のレポート、作文（論述文）における「最も」の使用率はいずれも50％以下であり、日本語学習者の使用に現れる特徴を見出すことができるが、硬い書き言葉における学習者の副詞の使用特徴をさらに検討するため、今回は中国人日本語学習者の学術論文に現れた「一番」と「最も」を分析し、如何なる特徴があるのかを見ていく。

３．研究対象と調査方法

（一）調査の対象

a. 学習者の卒業論文

中国の蘇州大学日本語専攻の学生が書いた卒業論文から2017年度の45本、2018年度の45本（計90本）を選定した。

b. 学習者の修士論文

CNKI（中国知网）に収録された「日本語言･文学」専攻の修士論文から、「日本語学・日本語教育」研究方向の90本（2006年～2016年の期間、40の中国大学に渡る）を選定した。

（二）調査の方法

データベース化した選定論文から「一番」「いちばん」「最も」「もっとも」をそれぞれ検出した。例文中の対象語、引用文中の対象語、名詞の「一番/いちばん」、接続詞と形容動詞の「もっとも」を除外し、副詞の対象語の計量データを確認した。

論文に出現した対象語は、「一番・いちばん」「最も・もっとも」のように書字形の違うものがあるが、以下では、特別な場合を除いて「一番」「最も」と示す。

４．調査結果および分析

（一）調査の結果

調査の結果、学習者の卒論では「一番」206語、「最も」258語（計464語）が検出され、学習者の修論では「一番」401語、「最も」396語（計797語）が検出された。両者の調査結果を一覧的に示すと、表１のようになる。

表１　学習者の論文における「一番」「最も」の調査結果

	学習者の卒論90本		学習者の修論90本		総計180本	
「一番」	206	44.4%	401	50.3%	607	48.1%
「最も」	258	55.6%	396	49.7%	654	51.9%
計	464	100%	797	100%	1261	100%

学習者の卒業論文における「最も」の使用率[3]は約55.6%、学習者の修士論文における「最も」の使用率は約49.7%であることが集計で分かった。先行研究の調査結果に比べれば、学習者の論文における「最も」の総計使用率は約51.9%であり、先行研究によるレポートと作文（論説文）における結果よりやや高いが、「一番」の使用率と拮抗しており、大きな変化は見られない。

さらに、学習者の論文における「一番」と「最も」の使用例を考察すれば、使用選択に影響している次のような要因が考えられる。例えば、

⑴　日本国立国語研究所の第一次統計資料（1978）によると、「基本語彙」を6880と指摘し、その中にもっとも重点の語彙は2249語と述べた。

⑵　張（1994）によると、…また、「とても」は動詞「ある」の否定形「ない」と動詞可能性の否定としか共起できないとしている。慣用構文としての予想を表す「～そうもない」は「とても」と呼応して用いられるのがもっとも多いと述べられている。

⑶　a. また、張紹傑･王暁彤（前掲、1997）の研究で、中国語には、慣習的間

[3]　使用率＝（語数÷対象語総語数）×100。対象語総語数は「一番」と「最も」の集計総語数。

接依頼表現方略が最も好まれ、65％を占めているということが明らかになった。

b. また、サールの発話行為理論の一番重要な成果だと見なされている間接発話行為理論を取り上げ、それが日本語の依頼表現にどう反映されているかを例文を通して論じたい。

(4) a. 陣内（2008）は日本語学習者の外来語に対する意識を探ることにより、…そして、中国語話者が最もカタカナ語を苦手とする母語グループであったと指摘した。

b. 鄧（2009）は韓国人中国語学習者を対象に、長期の授業現場の観察とアンケート調査という二つの調査方法で、韓国人中国語学習者における語音、語彙、文の構造などの回避現象が著しく、中国語レベルで中級である学習者の回避現象が一番顕著であることなどを明らかにした。

（すべて調査用学習者論文中の使用例、aとbは同一論文の例文、下線は筆者による）

例文(1)～(4)では、副詞「最も」がすべて参考文献の間接引用の部分に用いられている。例文(1)は「～と述べた」、例文(2)は「～と述べられている」、例文(3)aは「～という」、例文(4)aは「～と指摘した」との引用表現の述語が付いている。また、例文(3)bは(3)aと同一論文にある用例であるが、「～を取り上げ、～を通して論じたい」という意志･願望表現の文に「一番」が用いられている。同様に、例文(4)bは(4)aと同一論文にある用例であるが、「～を明らかにした」という平叙表現の文に「一番」が用いられている。

以上によれば、学習者の論文中の一部分の「最も」は、論文著者が文体差を意識した上での選択ではなく、間接引用の内容による影響のためであると考えられるが、これ以上の考察は今後の課題としたい。

（二）母語話者との比較

母語話者の使用と比較するため、『日本語教育』128号～165号（2006年～2016年）に掲載された日本人執筆の「研究論文」90本を選定し、論文における「一番」「最も」の使用状況を調査した。その結果は表２に示された通り、母語話者

の学術論文では「一番」17語、「最も」158語（計175語）が検出された。

表２　母語話者の学術論文における「一番」「最も」の調査結果

	母語話者の学術論文90本	
「一番」	17	9.7%
「最も」	158	90.3%
計	175	100%

日本語母語話者の学術論文における「最も」の使用率は約90.3%であり、「一番」の使用率（約9.7%）をはるかに上回ったことがわかる。それは「最も」が硬い書き言葉に用いられる表現であることを示すと同時に、日本語学習者の論文における「最も」の使用率との格差を示している。

５．まとめと今後の課題

以上、中国語母語話者の日本語学習者による卒業論文と修士論文によって、副詞「一番」「最も」の使用状況を観察し、日本語母語話者の学術論文との対比を行なった。ここからわかったことは、以下のようにまとめられる。

ⅰ）学習者の論文（卒業論文と修士論文）における「最も」の使用率は、「一番」の使用率と拮抗しており、先行研究の学習者のレポートと作文（論述文）に対する調査結果よりやや高いが、大きな変化は見られない。

ⅱ）学習者の論文中の一部分の「最も」の使用は、論文著者が文体差を意識した上での選択でなく、間接引用の内容による影響のためである可能性が存在する。

ⅲ）副詞「一番」「最も」の文体差は母語話者の学術論文のような硬い書き言葉において検証されることができるが、上級レベルの学習者の硬い表現には十分意識されているとは言えない。

ⅳ）副詞のような文体差による語彙の使い分けおよび語彙選択の有効な指導についてはまだ課題が残る。

石黒（2004：４）が指摘したように、「副詞や接続詞といった文法的な性格の強い要素における文体差の区別は、日本語母語話者なら自然に習得しているものなので、母語話者にはあまり意識されない、日本語学習者固有の問題になる」という実態がある。したがって、本調査の目的も文体差に着目した指導の必要性を強調することにある。

学習者の使用状況に関する調査は、学習地域、学習レベル、学習者の個人差などによって結果の違いがあるが、学習指導においては、日本語の文体差を意識しながらより一層日本語らしい表現ができるように指導するのを目標とすべきであり、それは上級レベルの学習者にとって必要なことと認識する必要がある。

今後、今回の調査結果を踏みながら学習者の使用選択に影響している要素をさらに考察し、学習者の個人差による副詞選択の特徴を検討していきたい。

【参考文献】

石黒圭. 2004. 中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴[J]. 一橋大学留学生センター紀要（07）:３-13.

小矢野哲夫. 1984. 副用語の指導上の問題点[J]. 日本語教育（52）:７-18.

佐藤洋子. 1981. 上級段階の作文指導[J]. 講座日本語教育（17）: 74-92.

島崎英香. 2015. 初級日本語学習者のための副詞90語の選定―日本語母語話者の副詞の使用実態を通して―[J]. 日本語教育研究（06）: 105-113.

小学館辞典編集部. 2003. 使い方の分かる類語例解辞典 新装版[K]. 東京 : 小学館.

小学館大辞泉編集部. 2012. 大辞泉 第２版[K]. 東京 : 小学館.

中坂富美子, 李德培. 2017. 程度副詞の類義語に関する韓日対照研究―「가장」「제일」と「最も」「一番」を中心に―. 日本語教育（81）: 45-58.

中俣尚己. 2019. コーパスとクラスター分析を用いた副詞の文体調査[R]. 日本語学会2019年度春季大会予稿集 : 33-40.

仁田義雄. 2002. 新日本語文法選書３ 副詞的表現の諸相[M]. 東京 : くろしお出版.

飛田良文, 浅田秀子. 2018. 現代副詞用法辞典 新装版[K]. 東京 : 東京堂出版.

渡辺史央. 2010. 論述文に現れた副詞の分析―留学生と日本人学生の作文より―[J]. 京都産業大学論集 人文科学系列（41）: 77-92.